

第三章 奈良町の盛衰

第一節 東大寺復興と奈良の賑わい

大仏の修理

大仏修造の計画

近世南都におけるもつとも大きなできごとは、なんといつても東大寺大仏の修理と大仏殿再建の事業であった。そしてこのときこそは、奈良町が江戸時代のうちでいちばん活気を呈し、賑わいを極めたときであった。

東大寺の再興は、松永兵火の翌永禄十一年（一六六〇）に早くも大仏再鑄の諭旨が出されたことにはじまる。これを『御湯殿の上の日記』にはつぎのように伝えている。

三月廿七日 (奈良) ならの大ぶつ (去) こその十月十日ひょうくわにつきて (諭旨) りんしのこと (近衛殿) こんねとの二てう殿すいしんいん文参り
て (奈良) ならよりもし (使僧) そうのほりて (上) くわんしゆ寺中納言申されて (簡修) 国々へいつる御れいに十てうにとんす上る (継子)

それとともに、この年の春には、山辺郡山田村の岩掛城主山田道安が銅板で仏面を作り、翌年みずから願主となつて私財をなげうち、螺髪を鑄造に着手した。道安は飛鳥井家の出で山田氏をつぎ、筒井順慶とも縁つづきであった。雪舟の画をしたい、その弟子揚月に彫刻を学ぶという芸術家の一面をもっていた。



露坐の大仏 『奈良名所八重桜』

弥陀寺の清玉上人に全国を勧進させたが、道安はその翌天正元年（二五三）に没して復興は頓挫した。そのうち天正十一年（二五三）に重ねて大仏再興の綸旨が下され、十七年（二五九）には豊臣秀長によってこの事業は続行されたが、それでもなお復興は遅々として進まず、慶長十五年（二六〇）には風雨のために大仏の仮屋が倒壊するというありさまで、東大寺の再興はついに元禄の時代を待たなければならなかったのである。

東大寺復興という大きな仕事は、もともと二、三の個人の力だけではできなかった。公慶上人の発願

東大寺や幕府の努力はもちろんのこと、奈良町や全国の人々の支援が必要であった。しかもなおこの事業の完成には、万治三年（二六〇）から元文三年（二五三）までの約七〇余年を要し、この間、東大寺側では大勸進職が、公慶から公盛・公俊・庸訓と四代の上人を経たのである。そのうえ、諸経費や資財などの値上がりとか幕府側の態度によって、はじめ東大寺が計画した規模よりは、かなり縮小されたものとなった。

道安の着手について、その翌年には京都でも螺髪鑄造がはじめられ、仮屋の材木の寄進があり、仏体の修補もおこなわれて、多少修理も進行したようである。『多聞院日記』の元龜二年（二五二）四月二十三日の条に、「大仏へ詣り、本尊柱ヲ立カへ下地ニテ可レ作之用意、昔モ本尊ノ腹中ニ心柱在レ之、則大ノ礎在レ之、元モ下地ヲハ柱クミシテスタチヲカキ、カヘヌリテ作レ之、其上ヘカネヲキカケタル欵ト見タリ」とみえている。その翌年には、朝廷からも東大寺にたいして、山田道安に再興を急がせるように綸旨が下され、織田信長も阿



公慶上人坐像（東大寺公慶堂）

東大寺の大仏および大仏殿の再建は、いままで露坐のままであつた大仏尊像の修理からはじめなければならぬもので、これらの計画は公慶の発願によつて立てられることになつた。公慶は十三歳のとき雨にうたれる大仏尊像を拜して、殿宇の再建を発願したという。『公慶上人年譜』にも

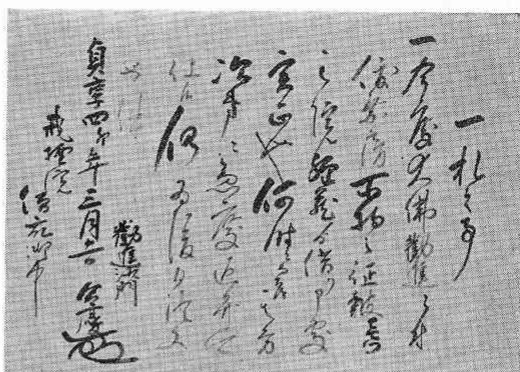
（万治三年十二月）十五日、上人盧舎那ノ大像ヲ拜ス、時ニ大ニ雨フル、歎ジテ曰ク、吾レ猶ヲ傘ノ撃ル有、仏像却テ露坐ス、風雨之ヲ侵スコト百有餘歳、豈ニ臣富テ而君貧カラシヤ、始テ大殿ヲ營スルノ志ヲ興ス、尔後日々仏像ニ向テ而泣ク

とその発願の由来をのべている。

公慶の父、鷹山弥次右衛門頼茂は丹後京極家の藩士であつたが、のち南都の水門郷に居住し、ついでいまの生駒市高山町に移つた。公慶は十三歳のとき大喜院英慶法印について入寺し、式部卿公慶と名乗つた。そして延宝五年

（一七七）にその師英慶法印が没し、公慶が大喜院をあずかることになつたが、そのときから、この事業がかれの計画によつて具体化するようになったのである。

この大仏殿再建に関する史料としては、東大寺所蔵の「東大寺年中行事記」玉井義輝氏蔵の「大仏殿再建記」、「序中漫録」などがあるが、元文二年（一七三三）九月に、当時の東大寺大勸進庸訓が勸修寺宮門跡濟深法親王のもとめによつて、公慶以来の留書に考証を加えつつ記した「龍松院公慶大仏殿再興発願以来諸興隆略記」および「龍松院公盛・公俊・庸訓代々諸興隆略記」の二冊が、ちかごろ勸修寺大経蔵から発見されたため、これによつて江戸時代の



公慶上人借用状 (東大寺蔵)
これは上人が諸国勸進を開始するにあたり、戒壇院にあった重源の鉦鼓を借用したときの借用証文である

大仏殿再建の経緯がより具体的に判明することになった。以下これを「興隆略記」と略称して使用することとする。

「興隆略記」によると、公慶は、貞享元年(一六八四)五月江戸に下って、寺社奉行坂本右衛門佐重治にたいし、「大仏漸及三破損二候間、御奉行所蒙三御免許、諸国致三勸進三修覆仕度之旨」を願い出たが、このときは、寺社奉行から「諸国勸化御許容之例近年無し之事」ということではねつけられた。しかし、再び同役の本多淡路守忠周にたいし、もしこの訴えが通らないときは大仏の仏体が崩れてしまう恐れがあると嘆願したために、幕府はその誠意を認め、大仏修造のための諸国勸進を「可し為三勝手次第一事」として、坂本重治を通じて許可したのであった。

このときの公慶の意図は『年譜』にみえるように、大仏は決して東大寺だけの所有物ではなくて、広く天下万民のための大仏であることを幕臣に訴え、これによって大仏修理や大仏殿再建の大義を明らかにしようとしたのであった。幕府当局の大仏勸進の許可を得てから、公慶はさらに朝廷にもその協力方を依頼した。

公慶は、まず大仏奉加のために自分の住坊である大喜院に人々を集め、東大寺の創建および鎌倉期の復興における俊乗房重源の苦勞などを物語ふうにとめた「南都大佛縁起」を講談して、その勸化の必要性を説明しはじめた。また、このことをさらに天下に知らせるために、かつて重源が勸進に用いた勸進鉦鼓を宝蔵からとり出し、自

分の勧化にあたってはこれを必ず携えることにした。貞享二年（一六六五）三月からは、さらに積極的にこの活動をはじめ、その勧進の根拠地として江戸浅草の長寿院に事務所を開設した。「追日信心の輩出来るに随って縁起講談して宝物を出だし、旅人これに結縁す」（「興隆略記」とあるように、江戸町中にも大仏講をひろめはじめたのである。

東大寺では、この年十一月に大仏修覆事始の儀式を営んで、修理の鉦はじめの期日を定めている。また胎内用材の修理のための法要をおこない、その間に大工の棟梁であった本座の次郎兵衛・五郎助、新座の忠兵衛の三人のほか、平庄二郎・弥太郎・惣三郎をも加えて鉦はじめの儀式を執行した。

奈良町民の協力

このように仏像修理の計画が次第に具体化していくと、奈良町民のなかから率先寄付をするものもでてきた。金銀・穀物・銅・鉄器を喜捨する人、また資財のある人で三〇〇金または五〇〇金を出すもの、あるいは一文銭をささげたり鏡をこわして寄付する者などがあり、なかにはその名も告げずに種々の捧物をするなど、大仏再興への気運がもりあがってきた。

公慶の奈良市中への勧進については「井上町中年代記」にくわしいが、貞享二年（一六六五）十二月から同三年にかけては大和一円をはじめ大坂・京都にまで勧進活動が拡大されていった。それとともに勧進にたいする寺務も多くなり、これまでのような大喜院の小規模のものでは、十分に機能を果たすことができなくなったために、新しく大仏殿跡の西に飯屋（二〇間）を建て、さらにここに一寺を建てて龍松院と名付けた。そして貞享三年（一六六六）二月に公慶は大喜院からここに移り、重源が宋から將來したという五劫思惟阿弥陀仏を安置して不断念仏を修し、一日一度はかならず阿弥陀法と大般若経を真読し、天下の泰平と大仏殿の成就を祈願した。以後大仏勧化の諸事務はこの院でおこなうこととなり、ここが東大寺勧進所と名を改められた。

その勧進の方法は、「興隆略記」に「此節専ら南都の町中に潤ほひ、町々におゐて講中おもた余多出来、掛金を定め、

表32 大仏殿再建調達用材

柱	用	1本	銀	13貫500目
貫	用	1本	銀	170匁
けた	た	1本	銀	1貫目
る	き	1本	銀	700匁
梁		1本	銀	1貫800匁
桁	形	大桁1個	銀	190匁
同	小	小桁1個	銀	13匁
う	ら	板	銀	50匁
な	げ	し	銀	50匁
瓦			銀	1匁
大	か	す	が	1匁
柱	大	か	す	が
大	蓮	華	1枚	銀
小	蓮	華	1枚	銀
				5分
				2匁
				200目
				5貫目
				3貫目

月並に奉納す。近国近郷より金銀米銭、或者尊像鑄掛の金具類日々奉納す」とあるように、南都の町中に大仏講を組織することであった。この大仏講について公慶は「大仏講名帳」を作成している。その募金などの組織は、家單位に鉢をまわして、これに米あるいは銀などを集め、日ごとにこれを勧進所で整理する方法をとっていた。「井上町中年代記」にも「大仏殿龍松院公慶上人、貞享五年辰二月十六日ニ町中へ鉢ニ御出被」成、御出被」遊候節、当町ニ而鉢銭壹貫文計、面々ニ遣し申候、但都合して其跡二月廿六日ニ鉢米として町より白米壹石式斗寄進仕候」とあることから、その方法および大仏講中の組織はほぼ判明する。そしてこれら町方の家族単位の寄進がおこなわれた結果、公慶は勧進所の阿弥陀像の前で、その家族の安泰と往生極楽を祈願し不断念仏を修していたと考えられる。

またこの大仏講は、単に米銭を集めるだけでなく、再建用材などの調達にも応じるなど、大仏および大仏殿建立のための庶民活動の基点としての役割を果たしていたのであった。大仏殿再建のための用材の募金するときにも、この講中の井筒屋孫兵衛・細井戸屋理右衛門・松屋作兵衛・大坂屋五郎兵衛など一七人の大仏講中は、表32に示したような大仏殿再建に要する用材・用具などの調達に依っている。この講の組織は、五人組制度をとっていた当時の

社会組織に即したものであった。大仏講がほとんど商家を中心に組織されていることで明らかのように、奈良の町民商家の協力なくしては、この大事業は進まなかったであろう。

これらの組織の協力をえて、貞享三年（二六六）二月には、約百二十年間雨露にさらされて破損していた大仏尊像の鑄掛けがはじめられた。この鑄造に関しては、公慶に親近していた当時の名工後藤観慶（玄順）がその経営にあずかった。なお玄順は金工の家、後藤乗

意の子孫であるという。「東大寺大仏開眼供養記」に

仏御頭 永祿年中大殿焼失之時落、当国山田道安以銅板板修之、今摸其面容鑄之 鑄物師沼津因幡國産
岩本兵衛正次
故蓮華十八枚失之今新鑄之

蓮華下石座 悉碎失今新造之 石工遠藤庄大夫
吉野又三郎

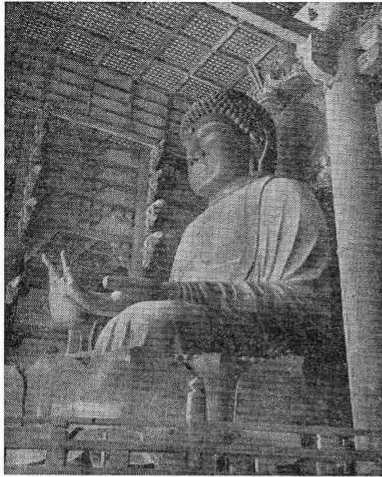
熟銅 六万五千七百五十四貫目

炭 二万八千五十六貫

とみえているように、この修理は非常に大規模なもので、その鑄かけは、油留木町のなべや弥左衛門・弥九郎兵衛が、一日一七人ずつをくりだして事にあたった。これら鑄造に必要な銅については、奈良町民の助力によっただけでなく、大坂難波の豪商北国屋治右衛門が銅塊三〇〇鈞(三〇斤を
鈞という)を寄進したことなどもあった。また、仏身は腰から上部は井桁に組んだ用材で上部をささえているので、その修理には木材も必要であり、これを大坂から山城の木津まで運び、そこから木びきして東大寺へ運び込んでいる。ついで貞享四年(二六七)には、一乗院の真敬法親王がみずから大仏の前に大香炉を寄進して、大仏修理の完成を祈願した。また台座の石座は長さ五二間、二八角の高さ七尺のものとして天領の梅谷村から切り出し、藤堂和泉守の寄付により元禄四年(二六九)三月に完成している。

開眼 供養 大仏の仏身の修理は、まず蓮花座からすすめられた。そのようすについては、「古稀転変見聞書」
につきのよう述べている。

鍋屋町鑄物師弥左衛門棟梁として鑄之、蓮花座より鑄かけ段々次第く鑄のほり候、鑄様はそれく処々のなりにかねは、平瓦のごとくして其所へあて、ろうかねを大ふいごを以て鑄流し申事也、惜哉、古の蓮花座ニハ菩薩の像を毛掘にいたし有也、今ハ見へず、螺髪は下にてひと鑄申候、(中略)御頭の上ニハ笠のごとくニ屋根有り、御かたよりひさしのをく廻りニ



東大寺大仏（銅造盧舎那仏坐像）

表33 大仏修覆入用銀

貞享3年2月～元禄4年2月

铸物師工数	40,206人	100貫515匁
唐金之目 <small>からかね</small>	65,754貫	380.3732
炭	28,056俵	58.116
日用者	38,582人	34.7238
鉄鍛冶、土砂手間		20.5368
材木大工、日用鍛冶		
石方手間		75.4312

屋根出来候也、铸申内へ参詣のもの釈迦の躰内へ入れ申候、内ニハ八角の石かき有り、皆しつくひつめ也
 铸造修理にあたって、天平の毛彫りが犠牲にされたこともわかるのである。

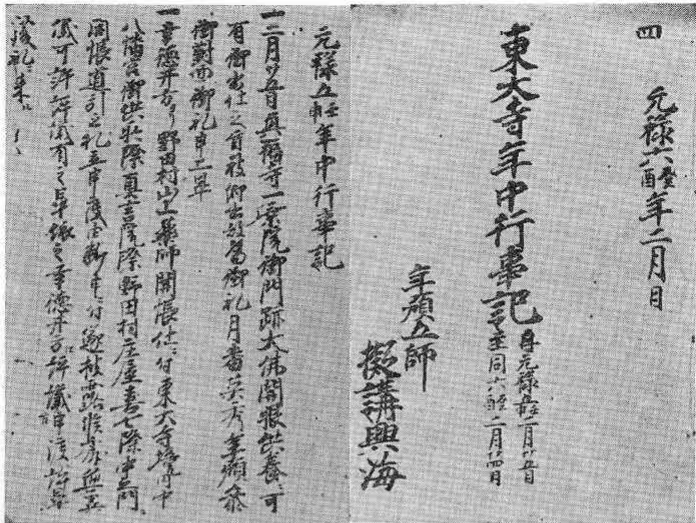
このような経過をたどって、元禄四年（癸）二月晦日には、その铸掛けが終了した。「大仏殿再建記」によると、その用材人員費用などは表33のようであった。

そののち、付帯の作事として像胎内の横材をとりかえ、新しく修理の完成した像を守るために仮の厨子をたて蓮弁などが雨露にさらされることを防いでいる。その屋根は板葺で、高さ九間、横七間の大きなもので、本殿の完成を待つことになっていた。そのほかに、なお最終的修補を加え、ついに元禄五年（癸）三月八日から四月八日までの一か月間にわたる開眼供養の盛儀を迎えることになった。

この間铸かけから実に約六年を要したのである。この法会にあたっては、開眼の導師は東大寺別当勸修寺宮二品深法親王がこれをつとめ、勅使として正四位下藏人頭右大辨藤原輔良朝臣が参じ、寺内の学侶および両堂衆四六人が出仕し、古鳥蘇・

う。

このときの用意として、舞台は法隆寺から借用し、その東西に鼈太鼓（もと東大寺の所有で、その銘があったが、のち興福寺が所有となり、明治以後、春日大社に保存されている）がお



「東大寺年中行事記」(東大寺蔵)

登天楽・蘭陵王・納管利など舞楽五番が演じられた。また幕府方の代表として奈良奉行の大岡美濃守忠高が参加し、町中を与力同心が警固した。東大寺以外からも、興福寺別当一乘院宮二品真敬法親王が同寺の六四人の僧と二〇人の従僧とともに願文をささげ、最終日には、華嚴長吏尊勝院兼安井門跡道愨大僧正が華嚴会をいとなみ、仏前の大灯笼の前に誕生仏を安置して灌仏をおこない、釈迦誕生の吉日を期して開眼法要の結願日を飾っている。また法華千部経の説誦があったが公慶は毎日結衆して千部経の導師となり、十輪院および永福寺衆僧三〇人もこの会中に参加している。そのほか法隆寺・唐招提寺・薬師寺・正暦寺などの僧や黄檗山万福寺の唐僧、時宗の鉢たたき、河内国大念仏寺の大通上人らも集まった。

この三一日間に出仕した僧二〇七〇人余、参詣受齋の僧二六五〇人余、無縁受齋僧七二〇〇人余、以上あわせて一万二八九九人を数え、僧以外の受齋にあずかったものは二〇万五三〇三人におよんだ。この法会の莊嚴盛大さがうかがわれよ

かれた。この法会にあわせて東大寺惣持院にあつた良弁僧正の衣・同袈裟・伝良弁自筆願無辺仏土功德経・印判・硯・聖武天皇宸筆の經典・光明皇后五月一日経・五獅子如意などを大仏の前の基壇上にならべ、仮屋を設けて三月八日から観覧に供した。また仮屋の柱には大幡二流、七重宝珠の幡一对をかかげ、藤掛似水・猪がい三左衛門の兩人から献納された大花立の花瓶が備えられた(いまも石壇前に安置されている)。またこの法会に用いた米穀は四五〇石八斗五升にもなつたといわれている。

町の 人 出

ここに大仏開眼供養という盛儀を迎えて、これに協力を惜しまなかつた奈良町民の喜びはまことに大きかつた。そのうえ諸国から押し寄せた参詣人も多く、奈良はこのとき空前のにぎわいを呈したのである。またこのときを期して、元興寺・璉城寺・慈眼寺・薬師寺・唐招提寺・秋篠寺・野田村の薬師堂などの諸寺が相ついで秘仏・秘宝を開帳したことも、このにぎわいを盛り上げたことであらう。このときの様子を以下「大仏殿再建記」などによって記してみよう。二〇万余の参詣人は、東は若草山の頂上から西は手貝町にかけて充満したといい、三月二十七日に奈良町に宿泊した人の数は、男女をあわせて四万九〇五四人であつたと記されている。大坂からの参詣者については、「取分大坂ノ諸人男女我一二ト先ヲ争ヒ、大坂ヲウチウツシテ詣、大坂高麗橋ヨリ(論詳)闕晴越、奈良マデ人相続ク、尺地モ遊地ナシ、イカヤウニ急ク旅人駕籠ニテ往来スル者モ、人ニセカレテ急カレズ、道ニ泊リテ二日カケニ大坂又ハ奈良ニ来ルヨシ」とあり、京都方面からは「山城国木津川渡守十三人、此度銀三十七貫目設クルヨシ、依レ之勧進所へ恩徳ヲ謝セン為ニ鳥目三十貫寄進、三十一日ノ内僧俗女子六万人余渡川、但シ三月廿七日ニハ一日ニ人数一万余渡川スルヨシ」と述べ、さらに「山城国加茂ノ渡ノ舟、常一、二艘ナラデハナシ、此度舟五十艘宛出ス、一日ニ三千五六百人ホトヅツ渡シメルヨシ、是ハ伊賀国ヨリ往来ナリ」と記している。

このような人出によって、商店もいままでにない繁盛を極めたのであった。たとえば、猿沢池の鯉に煎餅・饅頭などをあたえる人が多く、ついに鯉・鮒も浮きあがらないので、鹿が池に入ってこれを食べたといい、池の近くで菓子を商っていた人は、およそ金子一〇〇両余ももうけたであろうとわさされた。また、そのころ奈良中に饅頭屋の店が二五軒あったが、この人出で今井村・郡山から饅頭屋二〇軒が進出し、あわせて四五軒が奈良に店をならべたが、他国からきた人が奈良饅頭は名物と聞いて賞味したり土産にもち帰る人が多く、一軒ごとに三日のうち鳥目二〇貫をもうけたという話もある。さらに、大仏参詣の帰途、西大寺の愛染堂で豊心丹を買い求める人が多く、そのもうけは一日三〇貫におよび、のちにはこれも売りきれたといい、大坂道頓堀の芝居など、そのために見物人がなかつたとさえ伝えられている。

ちょうどこの大仏開眼の時期に、東大寺にほど近い登大路町に芝居屋敷があった。『奈良坊目拙解』によれば、それは、大智院の西隣(いまの大仏前十字路の西側)であり、ここで元禄五年(二六三)の大仏開眼供養以後、歌舞伎芝居や相撲などが行なわれた。ここを芝居屋敷といい、宝永年間に綿町地方屋敷に移るまで絶えることがなかつたと記している。

大仏殿の造営

再建の準備 大仏仏身の鑄造修理は、実は大仏殿完成への第一段階であったから、つぎの大仏殿再建への勸進と勸化は、すでに大仏修理中からすすめられていた。

すなわち元禄元年(二六〇)閏四月二日、東大寺別当济深法親王と華嚴長吏道恕大僧正を中心として、大仏殿新始千僧供養がおこなわれた。このときに参加した五畿内の番匠は、表34のように南都の土工組を中心とし、これに各

表34 各地から参加した大工組人数

大和	山城		
南都組	加茂組	117人	19人
郡山組	宇治組	34	3
西京組	下狛組	13	29
法隆寺八組	摂津	81	
多武峯組	大坂組	11	44
越知組	和泉	10	
今井組	堺北之庄組	10	14
矢田組	堺南之庄組	13	14
萬歳組	藏中組	6	5
笠目組	春木村	6	5
布施組	高石組	6	5
箸尾組	河内	6	
高田組	狛田組	6	10
三輪組	教興寺組	15	10
水間組	石川組	7	10
山中組	門真組	8	9
勢野組		8	
龍田組		6	
興留組		6	
三井組		6	
樅本組		19	

中門でおこなわれ、結縁のもの三〇〇人を集めて、玉女神祭・墨掛・絲引・斬立の順で進行した。その七日間に千僧供養が盛大におこなわれたが、そのときの記録によると、このあいだに齋食をうけたもの五万七一六〇人、結縁の四月八日の見物人は六八万人余といわれ、第六日に大坂から奈良までつづいた人波は、八里の間に旅人の乗った駕籠一六〇〇丁、歩行者は奈良まで連続するほど盛況であったという。このとき、奈良奉行の大岡美濃守忠高も法会に参加し、与力・同心もまたその期間中警固にあたった。また、大仏殿造営の総棟梁には京都の木匠堀内筑後少掾橋員長、堀内市郎右衛門尉満政(正利と)がえらばれて、本格的な準備の段階に入った。そして朝廷もまたこの斬始めの功を賞して、この年八月、公慶に上人号を勅許された。

さて、元禄三年(一六八六)には、大坂町奉行から大坂新川西端に大仏殿再建の用材を置く場所を借りる許可を得、ここに大坂の勸進所をつくっている。この地は、これから元禄十一年(一六九六)まで、西国地方からの資材の回船入津の場となり、公慶の弟子の無伯がこれを管理した。ここを大仏嶋といったが、それはいまの富島の地に当たると

地から加わった人たち合
わせて約六〇〇人に及ん
でいる。

工事は京都から出向い
た中井主水正の下知をう
け、棟梁には法隆寺の今
村正長・乾栄次があてら
れた。儀式は大仏殿跡の

いわれている。

大仏殿用材は、この大仏嶋から舟で淀川をのぼり淀を経て木津に到着する。そこから大車を用いるが、大木は牛三〜四〇頭と役夫三〇〇余人、小木は牛三〜四頭と役夫七〜八人で市坂を越え奈良坂を通り、転害門あたりから勸進所の木作所まで運びこまれた。また木作が始まるとともに、大仏殿跡の柱の礎石五八一個の掃除と、東西九二間、南北一〇八間の回廊の跡の整地をおこない、また回廊と大仏殿との間には、結縁の百姓たちによって芝はりの奉仕がなされた。

公慶はさらに用材調達のために、備前・美作・周防にも足をのばした。またいっぽう江戸にも大仏殿勸進のための根拠地を占めることに成功した。すなわち、まず浅草長寿院宿坊を借り、元禄五年（二五三）には本所高野山大徳院内に仮勸進所を構えた。これは蓮弁修理銘に高野山万勝院とあることの縁故によるものであろう。こうしてついに本所に大仏勸進所を開き、いままでの浅草の長寿院宿坊の間借りをやめ、江戸の大仏講中の支持を得て本格的な出張所を開設することができた。そして翌年、増上寺の貞誉大僧正を導師に迎えて勸進所開きを営み、尾張藩からも寄付を得て、ここを充実することができた。

元禄六年（二六三）二月に公慶は桂昌院から大仏殿勸進の喜捨を受け、ついで側用人柳沢出羽守保明（吉保）を通じて直接將軍に接近し、保明もまた大仏殿再建を積極的に援助する意欲をみせた。その結果幕府によって認められた「東大寺大佛殿再興勸進状」はつぎのようである。

南都大仏殿再興勸進之状

右、再興之意趣者、勸進帳令筆疏候通、天下安全武運長久諸民快樂之御祈禱也、發願以来已及十年候、以衆人之施入、大像之修補開眼之法会等、雖令成就候、然仏殿之儀者大数十余万金之経営故、一郡一国之助力ニ而曾以難及百分之一候ニ付、徒

經年月候処、天下之士庶、人別奉加之事、自今以後無遠慮可令勸化之旨、御免許之趣、御奉行衆被仰渡候間、御家頼(來)之諸士御領内之諸人、隨信心、人別一紙半錢被致喜捨之志候様奉願候 以上

戊十一月 大勸進上人龍松院

そしてこの勸進状を口上書にし勸進帳を添えて、諸国の大名・小名に残らず勸進することの許可を得たのである。この人別奉加の通達は、「諸大名中エ無遠慮ニ入候様ニ仰渡」されたものであり、いままで町中の庶民だけを対象とした一紙半錢の寄付勸進が、諸大名にも適用されることを意味し、一〇余万両の奉加への口火が切られたのである。公慶は、ここで元禄八年（一六九三）四月から十月まで勸進のために諸大名および旗本屋敷を巡行し、その翌年には京都と伏見で、江戸と同じく口上書と勸進帳をそえて町ごとに人別奉加を依頼し、大坂でも諸大名蔵屋敷や町々へ人別奉加をはじめた。

一人別奉加之儀、自今以後無遠慮、可令勸化之旨被仰渡候ニ付、勸化之状を以諸大名方、御旗本之面々迄願申上候処、少々

宛相集申候、尤未参方も御座候得共、只今迄相集候金高考申候得者、追々残高も少分之儀と奉存候事

一 拝領銀並諸大名方、御旗本衆、寺社方、町中奉加共、都合金高卷万両程相集申候事

一 大仏殿柱九拾貳本之内、陳廻之柱三十貳本相立置候得共、此上材木普請方諸事雑用大分之儀ニ付、一天下人別奉加之儀、毎年考人ニ拾貳錢宛施入在之候様仕度候、乍言志無之人者差置、志有之人者、自分之拾貳錢之外、現在之父母兄弟之祈祷

又者先考先妣、亡父亡弟之追善にも致施入、五人分も十人分も志次第施入仕之様仕度奉願候、如何

勸化仕貳年成共、大仏建立相済候迄、施入仕之様奉願候、凡五年程ニ者造畢可仕奉察候

と「東大寺年中行事記」にみえている。

しかし、勸進は人別奉加のたてまえをとっている以上その額は自由であったため、一〇余万両を必要とするこの大仏殿再興の目的額に達するにはなお困難があった。そのため公慶は、元禄十年（一六九七）九月に寺社奉行を通じ、

人別一二銭の定額奉加に切り替えることを願い出た。本来、人別奉加は当時一家の内一人だけと受けとられていたので、苦肉の策として一人一二銭、何人分もの施物を求めようとしたものである。その年限は二年で、計画実施から五年後に大仏殿の完成を見る目的で願書を提出したのであった。幕府も一応これを了解して、奉加銀一二銭とすることを許可した。この間、幕府側では老中土屋政直、側用人柳沢保明、寺社奉行永井直敬、護持院隆光、護国寺快意ならびに桂昌院の縁者であった本庄因幡守宗資らがその斡旋者であったようである。

**幕府の援助と
工事の進展** この幕府の指示による人別一二銭の奉加の決定は、大仏殿の再建が東大寺独自の勸財方式から離れて、幕府および奈良奉行所の直轄管理の方向へ展開する結果となった。そのために、幕府は同

年十一月に勘定奉行萩原近江守重秀を大仏殿勧進の幕府方の最高責任者とし、奈良では奈良奉行の妻木彦右衛門頼保を直接責任者とし、勘定方の代官大柴清右衛門を派遣することとした。こうなると、この大仏殿再建は単に東大寺だけの問題ではなく、幕府自体の面目の問題にかかわることとなったため、勧進の結果を待つことなしに工事を推進しなければならなくなったのである。

このような計画の大きな変更のため、幕府は勘定方南都代官大柴清右衛門を中心とし、勸化所の後藤玄順らのもとで、早急に大仏殿総見積をつくり目録を作成させたのであって、この見積書は、建築費用の全額と用材の調達、設計図および百分の一模型をふくめたものであった。そして、この作成には、大仏殿普請所で棟梁の堀内市郎右衛門・後藤玄順・小林喜右衛門らがあたり、幕府の要求にあう江戸好みの唐破風をそえて提出するなどその心づかいを示している。

幕府はこれにもとづき、大仏殿のほか中門・回廊をも再建する計画をみとめたのである。その結果、代官大柴清右衛門の手代篠原幸右衛門の手によって入札がおこなわれ、用材二万六七二三本（代銀三九七四貫六三十九六分
九厘一六方六二四三三歩）は、京都・

大坂・近江や大和の材木屋で引きうけることが決定した。元禄十二年（一六九七）に、大坂勧進所を渡辺橋寄りの大仏嶋の地から上塩町西五丁目に移したのは、用材の調達を便にするためであった。

しかし、大仏殿再建の資金調達については、公慶の心血をそそいだ勧進の努力にもかかわらず、一八万両の目標にはとうてい達しなかった（「興隆略記」「東大寺年中行事記」）。このため公慶は、幕府に石高による拠出金の決定を申請し、同時に東大寺方としても、大仏殿の間口の間数を当初の計画規模の一一間から、東西各二間を減少して七間とするなどの譲歩をしなければならなかった。

大仏殿再建の資金調達については、「大仏殿再建記」では、

大仏勸化金銀根元

御料並私領ヨリ黄金十万両之願、元禄十二卯年

於

公儀 龍松院上人申之

御料勸化金相調、御勘定頭ヨリ諸国御代官へ廻状

卯年九月廿八日之日付

高百石ニ金子沓歩宛之積、但年数五年卯辰巳午未迄從ニ御代官衆ニ南京奉行江納之

とみえて、いよいよ幕命で大仏殿再建事業の資金調達をはかることになり、その資金および工事の管理は幕府の勸定奉行と奈良奉行が全責任をもって推進することになったのである。そしてこれに関する役触状によると、

南都大仏堂修造入用銀勸化之儀、龍松院願ニ付在々勸化管候処ニ龍松院自力難届、其上ケ様之□縁之儀有之故、御代官衆江此方より申達之、村々割付金子取立、龍松院方江相渡管ニ候之間、各御代官村々より高百石ニ付金子沓歩宛取立、龍松院方江可被相渡之節、此方江開合可被申候、且亦銀子ニ而取立候ハ高百石ニ拾五匁宛積り候、私領者龍松院方より地頭江可申達候也

諸星伝左衛門 回

荻原近江守 ㊦

戸川備前守 ㊦

久貝忠左衛門 ㊦

井戸対馬守 ㊦

右之通御勘定所より被仰触候、写遣之間、高百石ニ付銀拾五匁宛積り来十五日より廿日迄内ニ南都御番屋敷江持参可仕候得者如此候 以上

卯閏九月十五日

大柴清右衛門 ㊦

右之通諸所御代官より御触流被成下之旨、大柴清右衛門より被仰聞被下候

と、幕府は大仏殿再建のために、一〇万両を天領と大名領から調達することを決め、勘定頭から諸国の代官所などに通達した。

もともと東大寺大仏殿は天下の大工事であったから、幕府もこの勸財にあたって非常に苦慮した。もちろん公慶上人の勸進ではとてもおぼつかなく労して効なしの状況であった。そこでさきに述べたように、幕府は資金を天領と大名領に分けて調達し、その工事の主導権を奈良奉行に移管することによって工事の進展をはかった。

この計画は護持院隆光と快意が中心となり、その取持ちを桂昌院に依頼して立案された。そしてまず天領や直参衆の所領などからの割当金の調達については、「私領分納り方之事、荻原近江守殿江茂 遂示談、御老中柳沢出羽守殿江茂 願候得共、中々以重キ御事也、（中略）御料分百石老分勸金被成候程ニ候得共、私領之勸金数年之寄り高、且此節数日回国之様子、尤人々之信仰不叶といへども、集り金銀之員数中々不准御料、難及自力事に候」（同略記）とて公領からの調達も思うにまかせなかった。このような状況のもとでは、大仏殿の完成の年限もはかりがたく、材木も不足し長期にわたり足場の木も破損しだすという状況となったため、幕府は自分の所領以外の諸大名の領地からの

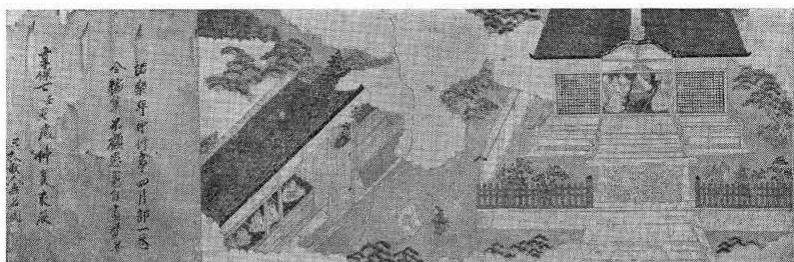
勸金を決定せざるを得なくなり、桂昌院から柳沢吉保に命令するところがあった。

その趣は公慶上人の諸国勸進活動を停止し、江戸屋敷の諸大名の家老たちを城中に呼びよせ「南都大仏殿修造金高百石に付沓分」と決定し、大仏殿の普請を奈良奉行の直轄事業として、その責任において指定期日までにおこなうとするものであった。いまや幕府の面目において完成を期することになったのである。

その費用は約一〇万両を計画したが、最終的には総入用金一二万一二九四沓分と銀三匁二分八厘で大仏殿の完成をみた。そのうち公慶上人が用意したのは一万一二〇六両にすぎなかったことは、いかに大仏殿の工事が単独ではおこないがたく、幕府の援助なしにはできなかつたことを示している。まことに国家的大事業であった。

東大寺はこの大事業を推進するにあたって、京都所司代を経由せず、直接表向きは幕府の寺社奉行・勘定奉行に働きかけ、裏面では隆光・快意らの動きを通じて桂昌院を動かし、將軍の命を以て全国的規模のもとに完成へ導いていたものである。そしてこのことを通じて、源頼朝の武家を背景として再興した鎌倉期の再興の前例と同様に、公慶を中心として武家による復興の必要性をとまえ再建へ進んでいったものであって、奈良と幕府との強いつながりを示す歴史的な事業であったのである。

江戸幕府が大仏殿の再建に積極的のり出したため工事ははかどり、幕府の命をうけた諸大名や旗本は、大仏勸化の金銀を奈良奉行に届けるようになった。公慶も桂昌院の援助にたよることとして諸国勸化を中止し、東南院内に東照宮を建てて幕府の協力にたいする感謝の意をあらわし、あわせてその後の援助を期待しようとした。この工事は進捗して元禄十五年（一七三〇）五月には上棟をみ、ついで東南院の開基聖宝僧正の像も大仏師朝慶によってつくられ、九月には開眼のはこびとなった。この東南院の東照宮の建物は、勸修寺の済深法親王が明正上皇の旧殿を拝受したものを移したものであり、その宸殿は東南院支配下の善性院の客殿を移築したものであった。また、元禄十



東南院東照宮「平城年中行事絵巻」(石崎直司氏蔵) いまは天皇殿とよんでい
る、左の文字はその末尾で、無名圖(古道)の署名がある

六年(一七〇)からは、大鐘の横に三間四面の俊乘堂を建て始め、宝永元年(一七〇四)には公慶の念願であった俊乘房重源の五百年遠忌を営むことができた。さらに周辺の修理をすすめ、大湯屋も修理された。

しかしなんととっても大仏殿の再建についての最大の難関は、大仏殿の大虹梁を得ることであった。この一三間物二本の松材は、薩摩の請負人によって霧島山系白鳥山で発見され、元禄十七年(一七〇四)正月に切り出してから八か月がかりで、九月によりやく大仏普請所に届けられた。

「興隆略記」には

(元禄十七年) 同日九月二日 五日大殿大虹梁式本各長十三間
末口三尺五寸 普請所着

造営専一之虹梁故、元禄之初より不絶諸国を尋、猶又近年公儀御威光を以、被遂御吟味候得共、間敷不足難相用及延引候、追日作事成^(就)寿候ニ付てハ無抛棟梁ニ申付、長十間式尺之虹梁を以可弁之旨相積候、然者蓮華座上ニ柱を建申事新儀之營故此儀敷入、未決之折節公慶不思議之夢アリ、依而諸国之到来を暫見合申所ニ、日向之国白鳥山ニ老松有之由告来、異変符合之儀有之候付、奉行衆江茂申談急見分被差遣候処、至極之虹梁也、則從日州白鳥之神山式本共伐出之、国主薩之大守より役人被差出夥敷多人歩を以、数十里之難所無故障引出シ鹿尾嶋より乗船、同国山川之津滞留、七月六日出船海上三百里日敷七ケ日、自七月十二日播州兵庫到着

薩州より材木荷物等上船之事、無上之難順風、七八日之内兵庫着船之事難及所也、今度大木を載七日之間、彼地着船之事希有之事也ト薩州之諸士被語之、其外船頭

等不思議之品、雖申承不記之

一同十六日大坂伝法川口ニ着、役人棟梁於此所見分之上、出船大坂より淀川筋船引人^(夫)歩、村々江御代官并御領主方より被仰付、八月十日木津着、同十九日より車力を以引出ス、毎日南都之町中近郷より思々ニ出立引之、大坂南都之講中品々之作り物等差出、大坂より淀木津南都着迄、公慶付添并役人毎日罷出ル、木津より陸地之分者、与力同心毎日前後警固

と、その事情を記している。古碕^{かん}和尚の木曳^口図^絵はこの有様を如実にえがき出している。先導をとりかけ声高く大虹梁を二本台車にのせて引き回す。それは大仏殿の再建にいかにも多くの人々が参加したか、また公慶を生仏として仰ぐ人たちがどれほど多かったかをあらわしている。

このいわば世紀の事業に対しての奈良町および周辺村々の人々の協力ぶりは「大仏殿再建記」にくわしく述べられている^(表35・表36)。

落慶法要

この巨大な虹梁を上げるには、棟梁堀内満政(正利)の計画にもとづいて大

轆轤が新調された。そして大綱でもちあげることができ

たのは、宝永二年(七五)三月で、この大工事を見物す

るために、京・大坂からくる人も多かった。こうして閏

四月十日には奉行妻木彦右衛門頼保以下諸役人をはじめ南都の年寄・月行事、奈良回り八か村の庄屋や年寄らも列席して、棟上げの儀式が盛大に行なわれた。そのよろ

表36
奈良周辺から出た人数
宝永元年8月19日～
9月4日まで

	人
木津郷	1,400
下郡山町	200
七条組 常福寺組	
三碓組 矢田組	401
中垣内組 大輪田組 磯壁組	
標本村組	300
古市組 磯上組	300
加藤組	
合計	2,601

表35
奈良町から出た人数
宝永元年8月19日～
9月5日まで

	人
8月19日	2,598
8月20日	1,151
8月22日	1,920
8月23日	1,489
8月24日	592
8月25日	721
8月26日	831
8月27日	614
8月28日	1,062
8月30日	600
9月1日	600
9月2日	1,547
9月4日	2,438
9月5日	1,800
合計	17,963

こびは東大寺だけでなく、奈良町中のものであって、上棟を祝つて南大門の前では能六番、狂言五番が演じられた。ここに棟札と上棟式のようにすを「再建記」から引用しておこう。

「大仏殿棟札」

聖主天中天 大檀那大梵天王 為別施入貴殿二世大願成就門滿並一天四海
迦陵頻伽声 風雨順時五穀成熟万民快樂也

元禄十年丁丑四月十五日建柱
宝永二年乙酉四月十日上棟

己奉再造東大寺大仏殿 大勸進沙門龍松院上人公慶敬阿弥陀仏

寶永六年己丑三月十七日上棟 寶儀 遺弟上人公盛善阿弥陀仏

宝永六年己丑三月廿一日堂供養
同四月八日結願

冥啟衆生者 大願主帝釈天王 為終尽未來際參詣諸人平等利益並伝聞
我等今敬礼 帰念衆生心中所願悉皆成辦也

奉行 妻木氏源頼保
横山氏小野元知
三好氏源長広

「再建記」

棟梁堀ノ内若狭、大紋風折烏帽子ノ装束ニノ南方棟木中通ニ新敷薄縁敷之、右ノ備物居之、若狭以三寸ヲ継三重ノ之土器ニ、暫時
勸進仕時之規式勤之、嫡子堀内市郎右衛門大紋風折烏帽子装束并大工小頭南木工大夫・大工肝煎法隆寺忠左衛門・奈良町治
兵衛・伝兵衛・源右衛門・三郎兵衛・八幡座大工仁左衛門・源兵衛・平大工八左衛門・佐右衛門・九兵衛・藤兵衛・清兵衛
・作兵衛十四人へ者、装束青袴着之、棟梁若狭ト与一所列座、爲ノ者二百二十一人、棟木納支配為致、當日相詰ル大工百四十人、
木挽ノ者三十五人、杣ノ者九人、中日用者十二人、右悉ク入普請場ニ、同日辰ノ中刻、御奉行妻木頼保俗名彦右衛門入普請場ノ
奉行ノ小屋ニ、拜見棟上ノ作法ヲ、祝儀ノ一献、赤飯、上人羞之、相並膳蓋ノ之僧ハ龍松院上人・見性院・清涼院・金珠院、隔
敷居ヲ、東大寺ノ衆僧并御奉行家来ノ者、与力士列座ノ祝一献ノ赤飯ヲ

覚

一 赤飯三十石但シ小豆共

一 豆腐 千挺余

一 昆若 五千挺程

一 献人数之覚

一 御奉行普請小屋江御出一献有之、下奉行・与力士・同心者一献有之、諸役人・大工・鳶・日傭・杵者・木挽・諸職人不残一献有之、凡人数五百人余、但シ上下共

一 当寺学侶・堂中・三箇院・諸役人一献有之、凡式百人余但シ上下共

一 南都町之年寄・月行司・坊領奈良回り八箇村庄屋・年寄・諸方有縁之諸客一献有之、凡九千式百人余但シ上下共

一 寺方医者衆一献有之、凡五十人余但シ上下共

一 京大坂南都堺大仏講中一献有之、凡五百人余但シ上下共

一 大仏前無縁ノ之参詣人、頂戴赤飯ヲ、此ノ人数難量

寄進物之覚

一 京都講中ヨリ 金五兩

一 大坂講中ヨリ 銀五十枚

一 南都講中ヨリ 鳥目五百疋

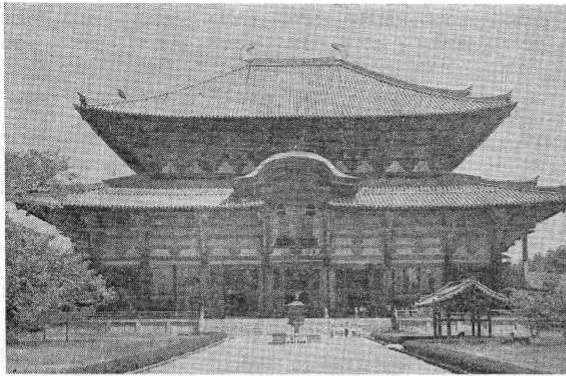
一 同所禅門講中ヨリ 鳥目五百疋

一 同所桜講中ヨリ 鳥目三百疋

一 同所尼講中ヨリ 鳥目三百疋

此外諸客銘々包銀・鳥目等有之

大仏殿上棟式後まもなく、桂昌院が亡くなった。桂昌院は大仏殿再興のかげの推進者であった。ついで当事者であった公慶もまた宝永二年（一七五五）七月、五八歳をもって江戸で没した。桂昌院と公慶の死は、大仏殿の再建については非常な痛手であった。しかし隆光の援助のもとに幕府側の再建計画はかわることなく、公慶のあとには公盛が大



東大寺金堂

表37 元禄再建大仏殿総規模

桁行	28間6尺2寸
梁行	25間4尺1寸
堂高	24間余
壇上	東西34間2尺5寸
同	南北30間5尺
総坪数	742坪1分
総木数	32,332本
柱数	{60本 差渡3尺5寸より5尺まで 大虹梁 2本 末口3尺5寸
足代松丸太	5,805本
足代竹	41,761本
大工数} 木挽袖}	271,376人
鷹日用人数	294,225人
瓦数	133,660枚
総入用金	121,294両1分銀3匁2分8厘

勸進となり、その後見には庸訓があたった。

宝永三年（七〇六）七月には、公盛は公慶のため御影堂（公慶堂）を完成し、つづいて九月に京都所司代松平紀伊守信庸が来寺して、大仏殿普請所を見聞し、工事の進捗状況を視察した。こうして翌年には、大仏殿の造営も完成に近づき、三年後に落慶供養を営むことができる見通しもできた。なおこの年、奈良奉行妻木彦右衛門頼保が没したため、あとをうけて三好勘之丞長広が大仏普請所の管理となり、宝永五年（七〇八）に大仏殿は、大仏普請所から東大

寺勸進所の龍松院に引渡された（表37参照）。

ついで、宝永六年（七〇九）三月、公慶の弟子の公盛は上人号の勸許をうけ、いよいよ二十一日から一八日間にわたる大仏殿落慶大法要がおこなわ

の落慶供養以後は、ふたたびみることができなかつた。

表38 大仏殿落慶大法要次第

初日	3月21日	華嚴会	導師道恕前大僧正 勅使万里小路尚房
第2日	3月22日	仏餉	公盛上人
第3日	3月23日	三論宗論義	(東大寺)
第4日	3月24日	東本願寺派	南都三か寺
第5日	3月25日	靈山正法寺	丸山安養寺 東山長楽寺
第6日	3月26日	西本願寺派	南都郡山四か寺并末寺14 人出仕
第7日	3月27日	河内太子無量寿院	
第8日	3月28日	梵網会	唐招提寺
第9日	3月29日	薬師寺	
第10日	3月30日	拈香	智積院ほか
第11日	4月1日	知恩院代	如来寺
第12日	4月2日	法隆寺	
第13日	4月3日	知恩院派	大坂衆僧
第14日	4月4日	百万遍	知恩寺派
第15日	4月5日	西大寺	
第16日	4月6日	融通念仏宗	河州平野大通上人
第17日	4月7日	黒谷金戒	光明寺
第18日	4月8日	東大寺	最勝会

れた。その次第は表38のとおりであった。
このときの受齋僧九五〇〇人、受齋俗一五
万一二〇〇人余、まことに盛大をきわめた法
会であった。

元禄五年(一六五三)の大仏開眼供養から宝永
六年(一七〇九)の大仏殿落慶供養にいたる前後
こそ、近世の奈良町としては、その繁栄の頂
点であったといえる。東大寺復興という大事
業のためにつくした奈良町の人々の物心両面
の労苦が大きかっただけにこの復興の成就の
喜びもまた格別であり、そのうえ諸国からの
参詣人をも加えて、奈良町の賑わいは言語に
絶するものであったようである。

しかしこのような奈良町の賑わいも、宝永